

基数形容詞の前の冠詞について

—— 定冠詞，不定冠詞，部分冠詞の共通部分としての定冠詞 ——

川 島 浩 一 郎*

1. はじめに

次の(1)や(2)でのように，基数形容詞 (adjectif numéral cardinal) の前に冠詞が現れることがある。

(1) *Les quatre verres de vin s'entrechoquent.* (A. Hochberg, *Mes amies, mes amours, mais encore ?*, Collection Pocket, 2005, p.56)

(2) *Elle a vingt ans de plus que lui. Les vingt ans de plus indiquent qu'ils ne sont pas frère et sœur.* (S. Testud, *Le Ciel t'aidera*, Collection Le Livre de Poche, 2005, p.49)

本稿の目的は，基数形容詞の前の冠詞を分析することによって，定冠詞が「定冠詞，不定冠詞，部分冠詞の共通部分」であることを論証することである。

論述の手順は次の通りである。考察の準備として，まず 2. では，定冠詞の *les* と不定冠詞の *des* には冠詞だけでなく，複数記号素も含まれていることを確認する。3. では表意単位の成立と区別の関係について考える。表意単位が成立するためには，換入が可能であることが必要である。また，他の単位と換入が不可能なものは，それが可能なものとは別物である。4. では「区別の解消」

* 福岡大学人文学部准教授

という概念を紹介する。ある環境で存在した区別が、別の環境で見られなくなる場合、その現象を「区別の解消」と呼ぶ。5.では、基数形容詞の前で、定冠詞、不定冠詞、部分冠詞の間の区別が解消することを指摘する。6.では、基数形容詞の前の冠詞が、定冠詞と同様の特定用法を持ちうることを利用して、定冠詞が定冠詞、不定冠詞、部分冠詞の共通部分であることを論証する。

2. 冠詞と複数記号素

冠詞と複数記号素（複数性を記号内容とする記号素）の関係について確認をしておこう。

定冠詞の *les* には定冠詞だけでなく、複数記号素も含まれている。同じく、不定冠詞の *des* には不定冠詞と複数記号素が同居している¹⁾。

伝統的な文法記述では、*le*, *la*, *l'*に加えて *les* も定冠詞、そして *un* や *une* だけでなく *des* も不定冠詞とすることが多い。しかし正確には、*les* は定冠詞というだけではなく、定冠詞と複数記号素のアマルガム (amalgame) である。同様に、*des* は純粹な不定冠詞ではなく、不定冠詞と複数記号素とのアマルガムである。アマルガム (形態重合) という用語は、複数の記号素が切り離せないかたちで現れることを意味する。

(3) *Personne, dans la famille, ne lisait les journaux.* (G. Simenon, *Le Petit Saint*, Collection Le Livre de Poche, 1964, p.108)

(4) *Max, [...], lisait le journal local.* (D. R. Koontz, *Miroirs de sang*, Collection Pocket, 1977, p.164)

たとえば(3)の *journaux* は *journal* と複数記号素のアマルガムであり、*les* は *le* と複数記号素のアマルガムである。実際、*les journaux* から複数記号素を除去すれば(4)のような *le journal* というかたちが残る。

(5) *Elle lit des journaux et des pièces de théâtre.* (Internet)

(6) *Il tenait un journal sous le bras.* (M. Chattam, *In tenebris*,

Collection Pocket, 2002, p.90)

同様に(5)の *des journaux* から複数記号素を除去すれば、(6)のような *un journal* というかたちが残る。つまり、ここでの *des* は *un* と複数記号素のアマルガムということになる。

3. 表意単位と区別

言語単位の成立は、他の言語単位との区別を前提としている。ここでは特に表意単位について見ておこう。

ある表意単位が成立するためには、他の表意単位との区別が必要である。言語記号は A であるか B であるか C であるか、複数の可能性があるときに限って、A であることや B や C であることに意味がある。論理的に A でしかありえない場合は、B や C でないのはもちろん、それは A でさえない。どれか一つでしかありえないのなら、A や B、C という区別そのものが無意味だからである。少なくとも、A、B、C という区別があるときの A と、それがいないときの A は別物と考えなければならない。

仮に人類の全てが女性であったとしたら、ある人間を指して女性と呼ぶことに何か意味があるだろうか。そのような場合には、そもそも性別という概念すら存在しえないはずである。また、猫という動物に三毛猫しか存在しないとしたら、「猫」の指示対象は「三毛猫」のそれに等しいのだから、「三毛」の部分には実質的な情報がないことになる。「三毛」という表意単位が意味を持つためには、ベルシャ猫や黒猫など、他の種類の猫との区別が前提となっていなければならない。

区別の存在は、選択が可能であることによって保証される。あれかこれかを選べるということが、選択対象の間に明確な区別があることを意味するからである。

(7) *Il aime bien la confiture. (Le Ciel t'aidera, p.117)*

- (8) *Il faut un peu de chance.* (M. Chattam, *L'âme du mal*, Collection Pocket, 2002, p.294)

たとえば(7)の *il* は、*elle* などと入れ換えが可能である。このことから、(7)の *il* が表意単位として明確に機能していることが分かる。表意単位として *il* か *elle* かを選べるという事実が、*il* や *elle* のような表意単位が成立するための区別の存在を保証しているからである。一方、(8)の *il* は他の表意単位との入れ換えができない。他の表意単位との区別が保証されていないのだから、この位置での *il* には表意単位が成立するための基盤がないことになる。(8)の *il* は実質的には、明確な表意単位でさえない（むしろ *faut* という動詞の一部）。少なくとも、*il* か *elle* かを選べるときの *il* とは別物である。実際(7)の *il* は人称代名詞であるが、(8)の *il* は非人称代名詞と呼ばれる。

B や C と換入 (commutation) ができるとき A と、B や C との換入ができないときの A は別物と考えなければならない。少なくとも、この2種類の A が、B や C との区別の有無という点において互いに異なっていることは明らかである。

4. 区別の解消

4.1. 音韻対立の中和

ある環境で存在した区別が、別の環境で見られなくなるとき、この現象を「区別の解消」と呼ぶことにしよう。ここでは「音韻対立の中和」を概観しておく²⁾。音韻対立の中和が、区別の解消のなかで最も古典的で、最も研究が進んでいる分野だからである。

たとえば、ドイツ語には *kraus* (ちぢれた) と *graus* (恐ろしい) あるいは *hake* (かぎで留める) と *Hage* (生垣) のように、/k/ と /g/ が入れ換え可能な音声環境 (語頭および母音間) がある。言い換えれば /k/ と /g/ は語頭および母音間で対立する。一方、語末においては [k] という実現形はある

が, [g] は見られない (/k/ と /g/ を入れ換えることができない). 実際 Tag (日) は [ta:k] のように, そして sag (言え) は [za:k] のように実現する. つまり語末では [k] と [g] の対立がない. これは, /k/ と /g/ の音韻対立が語末という環境で中和することを意味する³⁾.

4.2. 原音素

/k/ と /g/ の対立が中和する環境に現れるのは, /k/ と /g/ のどちらでもない. /k/ は /g/ との対立を, そして /g/ は /k/ との対立を含意した存在なのだから, /k/ と /g/ の対立が解消した音声環境には, どちらも現れることはできない (3.を参照). この環境に現れうるのは, /k/ と /g/ の対立を含意しない原音素 /K/ である. したがって, kraus の語頭での実現形 [k] が /k/ の変異体であるのに対して, Tag の語末での実現形 [k] は /K/ の変異体ということになる.

/k/ と /g/ の対立が解消するということは, これらの音素を弁別する関与特徴が無効化することを意味する. /k/ と /g/ を弁別する特徴が無効化したとき, そこには /k/ と /g/ の共通部分だけが残る. つまり原音素 /K/ は, /k/ と /g/ の共通部分に他ならない⁴⁾.

5. 基数形容詞の前での冠詞の区別の解消

一般に, 定冠詞, 不定冠詞, 部分冠詞には, それらの間に区別のある (換入が可能な) 環境が存在する.

(9) Je parle couramment l'anglais, [...]. (N. de Buron, *C'est fou ce qu'on voit de choses dans la vie !*, Collection Pocket, 2006, p.141)

(10) C'est de l'anglais. (F. Vargas, *L'homme à l'envers*, Collection J'ai lu, 1999, p.125)

たとえば(9)と(10)でのように, anglais の前で定冠詞と部分冠詞の入れ換えが可能なことがある.

(11) Vous aimez *le* café ? (A. H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.107)

(12) Fais-moi *un* café. (G. Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.378)

(11)と(12)に見られるように、多くの場合 *café* の前で定冠詞と不定冠詞を入れ換えることができる。

(13) Madeleine avala *un* Valium [...]. (T. Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.164)

(14) Il faut lui injecter *du* Valium. (J.-Ch. Grangé, *La ligne noire*, Collection Le Livre de Poche, 2004, p.187)

(13)と(14)は、Valium の前で不定冠詞と部分冠詞を入れ換えることができることを示している。

ところが、基数形容詞の前では、定冠詞、不定冠詞そして部分冠詞の間の区別が解消する。基数形容詞の前では、定冠詞、不定冠詞そして部分冠詞を入れ換えることができないからである (3.を参照)。

(15) *Les* deux garçons convoitent alors la jeune fille : [...]. (F. Dorin, *La rêve-party*, Collection Pocket, 2002, p.25)

(16) *Les* deux jeunes gens tuaient le temps dans la gare centrale de Rome. (F. Vargas, *Ceux qui vont mourir te saluent*, Collection J'ai lu, 1994, p.5)

たとえば(15)や(16)の *deux* の前には、不定冠詞や部分冠詞が現れることはない。基数形容詞の前では不定冠詞が省略されるという考え方があるかもしれない。しかし、そもそも基数形容詞の前には不定冠詞が現れる事例がないのだから、これは省略ではない。また、基数形容詞の使用はいわゆる可算名詞の存在を前提とするのだから、不可算名詞の存在を前提とする部分冠詞が基数形容詞の前に現れないことは自明である。

したがって les deux garçons や les deux jeunes gens における les は、不定冠詞とも部分冠詞とも入れ換えが不可能である。この事実、基数形容詞の前の冠詞が、不定冠詞や部分冠詞との区別を含意していないことを意味する。つまり基数形容詞の前の冠詞は、不定冠詞や部分冠詞との区別を含意した(9)や(11)のような定冠詞とは別物だということになる(3.を参照)。

しかし一方で、les deux garçons や les deux jeunes gens のような場合の基数形容詞の前の冠詞が、通常の定冠詞と同じもののように見えることも事実である。

この矛盾しているように見える事態は、定冠詞が定冠詞、不定冠詞そして部分冠詞の共通部分であることを示している。次の6.では、このことを論証する。

6. 無標の項としての定冠詞

6.1. 定冠詞の特定用法

定冠詞の特定用法 (emplois spécifique) が、冠詞の中では、定冠詞に特有の用法であることを確認しておこう。不定冠詞にも部分冠詞にも、基本的に特定用法はないと言ってよい。

(17) Un taxi à Paris ? Tu ne connais pas *la ville* ! (M. Levy, *Toutes ces choses qu'on ne s'est pas dites*, Collection Pocket, 2008, p.193)

たとえば(17)の *la ville* は特定の都市(ここでは Paris)を指示している。このような場合の定冠詞の意味機能は、特定用法と呼ばれる。

(18) *Un homme* apparut enfin, [...]. (M. Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.321)

(19) Assied-toi, je viens de faire *du thé*. (F. Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.31)

一方、(18)の *un homme* や(19)の *du thé* では、特定の人物や紅茶が指示さ

れているわけではない。

(20) Mais tu as *une femme*, [...], *un métier*, *des amis*... (G. Musso, *Parce que je t'aime*, Collection Pocket, 2007, p.28)

確かに(20)においては、*une femme*, *un métier*, *des amis*が現実世界にどのような対応物を持つかは、この発話の話者や対話者にとって既知の事柄である。自分の妻が誰だか分からないはずはない。しかし(20)で問題となっているのは、特定の妻、仕事、友人ではなく、誰でもよいから妻や友人と呼べる存在がいるという事実であり、また何でもよいから仕事を持っているという事実なのである。

6.2. 定冠詞と原冠詞

定冠詞、不定冠詞、部分冠詞に何らかの共通部分があることは、これらが冠詞であることから明らかである。つまり、少なくとも「冠詞であること」はこれらの共通部分だと言ってよい。

冠詞(定冠詞・不定冠詞・部分冠詞)の共通部分を、原音素をまねて「原冠詞」と呼ぶことにしよう(4.2を参照)。以下、原冠詞と同じく、定冠詞もまた「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」であることを論証する⁵⁾。

まず、冠詞それぞれを構成する要素が次のようであると仮定してみよう。

定冠詞：冠詞の共通部分 + 定冠詞に特有の特性

不定冠詞：冠詞の共通部分 + 不定冠詞に特有の特性

部分冠詞：冠詞の共通部分 + 部分冠詞に特有の特性

原冠詞：冠詞の共通部分

つまり定冠詞は「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」と「定冠詞に特有の意味特性」を持つと仮定する。同様に不定冠詞は「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」と「不定冠詞に特有の意味特性」を持ち、そして部分冠詞は「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」と「部分冠詞に特有の意味特性」を持つと仮定する。

既に観察したように、基数形容詞の前では定冠詞、不定冠詞そして部分冠詞の間の区別が解消する (5.を参照)。つまり基数形容詞の前に現れる冠詞は、原冠詞 (定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分) である。

(21) Maître Plissier avait posé sur la table *les quatre boîtes* en fer.
(E.-E. Schmitt, *La rêveuse d'Ostende*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.131)

(22) On l'informa qu'il était reparti avec *les boîtes* pour se préparer à l'audience. (*La rêveuse d'Ostende*, p.131)

(21)の *les quatre boîtes* の原冠詞と(22)の *les boîtes* の定冠詞が、同じ用法を持つことに着目しよう。これらは、どちらも特定用法として解釈できる。つまり原冠詞と定冠詞が同じ用法を持ちうることになる。そして、特定用法は定冠詞に特有の用法である (6.1.を参照)。ここに矛盾が生じる。

上の仮定で解釈するのであれば、特定用法は「定冠詞に特有の特性」から生じることになる。不定冠詞や部分冠詞は特定用法を持たないからである。ところが、定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分である原冠詞が特定用法を持ちうるという事実は、特定用法が「定冠詞に特有の特性」に由来するわけではないことを示している。この2つの事態は明らかに矛盾である。したがって、上で提示した仮定は正しくない。

このような矛盾を生じさせないためには、冠詞それぞれの意味構成要素を次のように考えなければならない。

定冠詞：冠詞の共通部分

不定冠詞：冠詞の共通部分 + 不定冠詞に特有の特性

部分冠詞：冠詞の共通部分 + 部分冠詞に特有の特性

原冠詞：冠詞の共通部分

つまり、定冠詞は「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」そのものに他ならない。言い換えれば、定冠詞は「無標の冠詞」である。一方、不定冠詞に

は共通部分以外に「不定冠詞に特有の特性」という標識がある。部分冠詞には共通部分に加えて「部分冠詞に特有の特性」という標識がある。

(23) *Les deux autres* disparaissent... comme par enchantement. (*La rêve-party*, p.240)

(24) Je regarde devant moi. Ils sont cinq. Où sont *les autres* ? (S. Testud, *Il n'y a pas beaucoup d'étoiles ce soir*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.129)

たとえば(23)の *les deux autres* の原冠詞と(24)の *les autres* の定冠詞は、どちらも特定用法である。ただし原冠詞と定冠詞はどちらも「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」であるから、両者が同じ用法を持ちうることに矛盾はない。

原冠詞は冠詞の共通部分であるから、それが特定用法を持ちうるのは「不定冠詞に特有の特性」と「部分冠詞に特有の特性」のどちらも持たないからだと考えざるをえない。要するに「不定ではない」ということから特定用法が生じているのである。定冠詞の特定用法も、これと同じ成立基盤を持つ。

(25) Il aimait *la vitesse*. (A. Gavalda, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.271)

(26) Puis le taxi prit *de la vitesse* [...]. (*Sauve-moi*, p.276)

付言すれば、(25)と(26)に見られるように、定冠詞はかたちのうえでも、定冠詞と部分冠詞の共通部分である。

6.3. 原冠詞と不定冠詞・部分冠詞

不定冠詞も部分冠詞も「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」ではありえない。

(27) *Une minute*, deux minutes peut-être s'étaient écoulées. (G. Simenon, *L'évadé*, Collection Folio, 1936, p.12)

(28) Nous buvons *du vin*. (*Le Ciel t'aidera*, p.49)

たとえば(27)の *une minute* に見られるように、不定冠詞の使用は名詞の可算性を含意している。また(28)の *du vin* に見られるように、部分冠詞の使用は名詞の不可算性を含意している。

不定冠詞を「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」と仮定すると、可算性の含意はこの共通部分から生じることになる。この場合、部分冠詞が可算性と不可算性の両方を含意することになって、矛盾してしまう。

また部分冠詞を「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」と仮定すると、不可算性の含意はこの共通部分から生じることになる。この場合、今度は不定冠詞が可算性と不可算性の両方を含意することになって、これも矛盾してしまう。

(29) *L'homme* avait la soixantaine, [...]. (G. Musso, *Seras-tu là ?*, Collection Pocket, 2006, p.20)

(30) Vous aimez *le vin* ? (T. Jonquet, *Comedia*, Collection Folio, 2005, p.247)

「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」としての定冠詞には、このような矛盾は生じない。定冠詞は(29)の *l'homme* でのように可算名詞に対応可能なだけでなく、(30)の *le vin* でのように不可算名詞にも対応可能である。定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分には、それが限定する名詞の可算性・不可算性という区別はないことになる。

6.4. まとめ

以上、基数形容詞の前の原冠詞が特定用法を持ちうることに着目することで、定冠詞が「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」に他ならないことを論証した。言い換えれば、定冠詞は、「有標の冠詞」である不定冠詞・部分冠詞に対する「無標の冠詞」である。

定冠詞と原冠詞が特定用法を持ちうるのは、これらが「不定冠詞に特有の特性」も「部分冠詞に特有の特性」も持たないからである。つまり「少なくとも

不定ではない」からに他ならない。

定冠詞と原冠詞が別物であることも強調しておきたい。前者が不定冠詞や部分冠詞との区別を含意しているのに対して（これらと入れ換えが可能である）、後者にはそれがない（3.を参照）。

7. まとめ

本稿では、基数形容詞の前で定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の区別が解消するという事実を利用して（5.を参照）、定冠詞が「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」であることを論証した（6.を参照）。つまり定冠詞は、不定冠詞や部分冠詞に対する「無標の項」である。

定冠詞と同じく、基数形容詞の前に現れうる原冠詞もまた「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」である。ただし、定冠詞と原冠詞は互いに別物である。定冠詞が不定冠詞や部分冠詞との区別を含意しているのに対して、原冠詞は不定冠詞や部分冠詞との区別を含意していない（3.を参照）。

原冠詞が特定用法を持ちうるのは、それが「不定冠詞に特有の特性」も「部分冠詞に特有の特性」も持たないからである。言い換えれば「少なくとも不定という意味特性は持たない」ということから特定用法が生じている。定冠詞の特定用法も、これと同じ成立基盤を持つ（6.2.を参照）。

(31) Je passerai prendre le colis dans *les deux jours*. (F. Vargas, *Un peu plus loin sur la droite*, Collection J'ai lu, 1996, p.226)

(32) L'amour, cela consiste à faire *les cent pas*. (Boileau-Narcejac, *Les victimes*, Collection J'ai lu, 1964, p.5)

(33) L'homme avait dans *les trente-cinq ans*. (*In tenebris*, p.207)

(31), (32), (33)のように、基数形容詞の前の冠詞が特定用法とも総称用法とも異なる振る舞いを見せることがある。これらの冠詞の用法についても、この冠詞が「定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分」であることを出発点にし

て分析がなされなければならない。

[註]

- 1) MARTINET (1979 ; 37) を参照.
- 2) 中和と原音素の理論については AKAMATSU (1988) が詳しい.
- 3) DUCHET (1981 ; 61) を参照.
- 4) 音韻対立の中和が成立するためには、当該の音素が排他的連関 (rapport exclusif) にあることが前提となる.
- 5) 定冠詞を「無標の冠詞」とする考え方については、渡瀬 (1990) を参照.

[参考文献]

- AKAMATSU, Tsutomu (1988), *The Theory of Neutralization and the Archiphoneme in Functional Phonology*, John Benjamins.
- DUCHET, Jean.-Louis (1981), *La phonologie*, Presses Universitaires de France.
- FURUKAWA, Naoyo (1986), *L'article et le problème de la référence en français*, France Tosho.
- 川島浩一郎 (2009) 「前置詞的な comme をめぐる区別の解消」『ふらんぼー』第 34 号, 東京外国語大学欧米第二課程フランス語研究室フランス研究会, 35-50.
- 川島浩一郎 (2010) 「定冠詞と人の名前について」『ふらんぼー』第 35 号, 東京外国語大学欧米第二課程フランス語研究室フランス研究会, 1-18.
- 川島浩一郎 (2010) 「X (c)est X 型トートロジーとことばの遊び」『フランス語学研究』第 44 号別冊, 日本フランス語学会, 39-56.
- KAWASHIMA, Koichiro (2010), "Neutralisation en japonais. Une application de la théorie d'André Martinet au Japon", KLEIN, J.R. et F. THYRION

(eds), *Les études françaises au Japon. Tradition et renouveau*, Presses Universitaires de Louvain, 119-126.

MARTINET, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, Didier.

渡瀬嘉朗 (1990) 「定冠詞と「自己」照応形式 (その1)」『東京外国語大学論集』第40号, 65-78.

* 本稿は渡瀬 (1990) に触発・啓蒙されて執筆した。もちろん間違いや誤解のすべては筆者自身のものである。

(2010年11月8日提出)